

## 帰宅願望のある利用者へのアプローチ

### ～利用者の生活歴を個別ケアに活かす～

蜂須 真衣<sup>1)</sup> 清水 久人<sup>1)</sup> 木村 聡<sup>1)</sup> 滝原 典子<sup>1)</sup> 美原 恵里<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護部

2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]人口の高齢化が急速に進行している我が国においては、令和 7 年までに認知症高齢者が 5 人に 1 人の割合に増加していくと想定されている。認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で、自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すことを提言している。当施設は、開設当初から認知症専門棟を運営し、認知症を有する利用者の在宅復帰・在宅支援に取り組んできた。このような中、利用者が呈する認知症の行動・心理症状(BPSD)の対応について、家族や職員が苦慮することは少なくない。毎日新聞社が発刊している「思い出ノート」は、100 の質問に答えていくと自然に自分史ができ上る仕組みになっており、認知症予防にも利用されている。今回、BPSD のひとつである帰宅願望が著しい利用者に対し「思い出ノート」の一部をアセスメントツールとして利用、利用者の生活歴から興味・関心事を汲み取って個別ケアに活かし、早期に BPSD の軽減が認められた事例を経験したので報告する。

[事例]93 歳、女性(要介護 2 MMSE13 点)。X 年 Y 月、A 県で 1 人暮らしをしていたが脳梗塞を発症。入院を機に B 県で暮らす娘の元に転居。リハビリと家族のレスパイトケアを目的に当施設に入所した。入所当初より「ここにいっても何もやることがない。A 県に帰らせて。」など、長年生活していた A 県にある自宅への帰宅願望が強く現れた。日中を通し職員に対し帰宅願望を訴えるか居室で横になっているかの生活を送り、食事摂取量も低下していた。

[取り組みの内容]利用者は入所後、不活発な状態が持続しており、その対応が求められた。職員間で対応について検討を重ね「思い出ノート」という自分史を作成できるツールを用いて利用者の生活歴や興味・関心事を聴取した。利用者が、以前 A 県で本屋に勤めていたことを把握し、この記憶や経験をケアに活かさないかと病棟カンファレンスで検討した。その結果、利用者が愛着のわくような図書カードと図書バッグを

一緒に作成し、利用者が好きな著者や好みの本を中心に本棚を設置、「ミニ図書館」として利用者の日常生活に組み入れた。

[取り組みの評価方法] 取り組み開始前1週間をアセスメント期間とし、個別ケアを実施した1週間を取り組み期間とし、(1)心理状態の評価は脳卒中感情障害(うつ・情動障害)スケール(JSS-D、JSS-E)を用い、(2)帰宅願望は1日当たりの訴える回数、(3)BPSDはNeuropsychiatric Inventory-Brief Questionnaire Form(NPI-Q)、(4)職員の介護負担はNPI-Qにより、また(5)毎日の食事摂取量について、それぞれ調査した。

[結果] (1)JSS-Dはアセスメント期間の初日16.17点、取り組み期間最終日3.14点で、「気分」「悲観的考え」「日常活動」「不安・焦燥」「表情」の評価が改善した。JSS-Eはそれぞれ19.1点、4.67点であり、「気分」「不安・焦燥」「表情」「日常生活動作」「脱抑制行動」の評価が改善した。(2)帰宅願望の訴え数は、アセスメント期間中1日平均 $55 \pm 2.0$ 回であり、取り組み期間中の1日平均 $22 \pm 1.9$ 回に減少した。(3)BPSDについてNPI-Qは、「興奮」「うつ」「無関心」の項目がアセスメント期間の初日3点から取り組み期間最終日2点に改善した。「不安」「易刺激性」「夜間行動」はそれぞれ3点から3点、「食行動」は2点から2点と変化は認められなかった。(4)職員の介護負担についてNPI-Qは、「興奮」「うつ」「夜間行動」に対して、アセスメント期間の初日4点、取り組み期間最終日2点、「不安」「易刺激性」に対して、開始前4点、終了後3点、「無関心」「食行動」に対しては開始前2点、終了後1点と何れも改善した。(5)食事摂取量(主食/副食)は、朝食についてはアセスメント期間中7.7/7.0、取り組み期間中7.4/5.7、昼食はそれぞれ2.7/3.9、6.4/6.0、夕食に関してはそれぞれ6.3/5.6、5.7/6.1で、昼食に関して改善が明らかであった。

[考察]アセスメント開始中は、利用者の興味・関心事が「A県に帰る」であり、取り組み2日目までは思い出ノートの聴き取りに対し「なんでそんなこと聞くの」など、関心を示さなかった。3日目以降は徐々に笑顔の頻度が増え、地元A県での思い出話に「いい所だよ、遊びにおいで。でも帰りたい」など笑顔で話してくれるようになった。利用者が、本屋で働いていたことという生活歴、また好きな作家は誰か、どんなことに関心があるかを知ることができ、ミニ図書館の設置やバック・図書カードを作るなど、個別ケアを展開することにつながった。その結果、利用者の離床や活動の機会は増え、居室で横になる時間も少なくなり、食事もしっかりと摂取するようになり、帰宅願望の

訴えは軽減、さらに全身状態の安定につながったと思われる。このような利用者の状態の改善は、個別ケア開始早期から認められ、職員の介護負担の軽減にも結びついた。しかし、ミニ図書館に設置した本を他の利用者が持って行ってしまうなど問題が発生し、この取り組みを継続することは困難となった。その結果、帰宅願望、意欲低下などが再燃してしまったことが課題となり、別のケア環境整備の方法を検討する必要性が生じている。

[結語]帰宅願望が著しい利用者に対し「思い出ノート」の一部をアセスメントツールとして利用、利用者の生活歴から興味・関心事を汲み取って個別ケアに結びつけた。その結果、利用者に見られた BPSD は早期から改善、精神状態は安定した。適切な個別ケアを提供するには、利用者の生活歴、人物像などを把握することが重要である。

[要旨]帰宅願望が著しい利用者に対し「思い出ノート」の一部をアセスメントツールとして利用、利用者の生活歴、興味関心事を把握した。その情報を基にミニ図書館の設置などの個別ケアの提供に結びつけた。その結果、早期に帰宅願望の訴えは軽減し、精神状態は安定した。生活歴を反映させたケアの実施は、利用者の BPSD に対する即時効果が期待できる。